

牛のワンショット過排卵誘起法の確立

背景と現状

日本国内では年間のべ1万頭以上の牛で過剰排卵誘起が行われている。

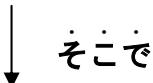
過剰排卵誘起の注射回数

肉用種（黒毛和種）では4～6回

乳用種（ホルスタイン種）では8～10回



この方法では労力もかかり煩雑、牛に対するストレスも大きい



卵胞刺激ホルモンを水酸化アルミニウムゲルに吸着させて黒毛和種の筋肉内に注射したところ、卵胞の発育を誘起できることが分かった。

しかし、ロットによって採卵成績ばらつく→普及に向けての改良の余地有り

研究内容

1. 卵胞刺激ホルモンの徐放性に優れた担体の開発—高性能で安定的な製剤の開発—
2. 担体の卵胞刺激ホルモン保持能および徐放能の検討—製剤の評価をめざす—
3. 肉用種皮下投与法の検討—皮下投与により薬剤投与量の軽減を図る—
4. 乳用種に対する投与法の検討—乳用種での効果を検討—
5. 肉用種を用いた実証試験—現場への普及をめざして—

達成目標



期待される波及効果

労力の大幅な低減 ストレスの低減による受精卵の品質の向上
簡便化による需要の増加